

論 文

夫妻のテレワーク実施状況における 理想と実際の生活時間の乖離に関する分析

平 河 茉 璃 絵

概 要

本論文では独自に実施したアンケート調査を用いることで、夫妻のテレワーク実施状況（夫妻どちらもテレワーク実施、夫のみテレワーク実施、妻のみテレワーク実施、夫妻どちらもテレワークなし）と夫妻それぞれの理想とする生活時間と実際の生活時間の乖離との関係を検討した。本論文の分析によって明らかになったことは以下の通りである。共働き世帯の夫の睡眠時間と労働時間に関して、夫妻双方がテレワークをしている場合、夫妻が双方ともテレワークをしていない場合と比べて理想と実際の乖離が縮小する。睡眠時間に関しては妻も同様である。睡眠不足の状況やオーバーワークと感じる状況が改善されており、テレワーク勤務が一定程度、ワーク・ライフ・バランスの達成に寄与している可能性が考えられる。その一方、末子が6歳未満の世帯の妻の家事時間に関して、夫妻の双方あるいはどちらか一方がテレワーク勤務の場合、理想とするよりも実際の家事時間が長い。このことは、夫がテレワーク勤務をしていたとしても子どもが幼いうちの家事負担は妻に偏重している可能性を示唆している。

I. はじめに

近年、少子高齢化の進行に伴う生産年齢人口の減少や、育児・介護との両立といった働き方のニーズの多様化に対応するため、「働き方改革」の実現に向けた取り組みが強化されており、そのような取り組みの1つとしてテレワークの推進が掲げられている。テレワークの普及によって勤務場所の制約にとらわれることなく働くことが可能になれば、子育てや介護など、ライフステージに対応した働き方ができるようになるだろう。さらに、育児・介護休業法の改正により、令和7年4月1日から事業主に対して3歳未満の子を養育する労働者がテレワークを選択できるように措置を講じることが努力義務化されることとなった¹⁾。テレワーク制度の導入によって子育て期に対応した働き方のオプションが増えることは、育児期における男女のワーク・ライフ・バランスの達成に資すると考えられる。

テレワーク勤務を行うと通勤時間が節約され、在宅の時間が増えることが予測されるが、このことは労働者やその配偶者の生活時間にどのような影響を与えるだろうか。テレワーク導入による労働者

¹⁾ 厚生労働省（2024）「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律及び次世代育成支援対策推進法の一部を改正する法律の概要（令和6年法律第42号、令和6年5月31日公布）」（<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000788616.pdf>）を参照。

の労働時間、家事時間、育児時間、その他生活時間への影響については、既存研究の蓄積がある。労働者自身の時間配分に関する研究において、既存研究ではテレワーク勤務によって労働時間は短くなり、余暇時間は長くなるという結果が得られている。たとえば、Giménez-Nadal *et al.* (2018) はテレワーカーと通勤者の市場労働時間、非市場労働時間、余暇時間の配分の違いを分析した。その結果、テレワークをしている者はオフィスに通勤している者と比べ、非市場労働時間と余暇時間が長いことを示した。また、Bardon and Zeballos (2020) は在宅勤務者と職場勤務者の主要な活動の時間配分の差を分析し、在宅勤務者はオフィスに通勤している者と比べ、労働時間と個人的ケアの時間が短い反面、余暇時間、睡眠時間、食事に関する時間（料理の時間、自宅での飲食）に多くの時間を費やすことを明らかにした。

夫妻間の時間配分に関しては、Del Boca *et al.* (2020) がイタリアのデータを用いて、新型コロナウイルス流行に伴う非常事態宣言前に共働きであった世帯を対象に新型コロナウイルス流行前後における夫妻の家事、育児、ホームスクーリングの時間に与える影響を究明した。その結果、妻が在宅勤務やオフィス勤務をしている場合、妻が非常事態宣言の間に無職となった場合と比べて夫の家事時間が増えることを示した。その一方、妻の家事時間は夫の働き方によって変化しないことを明らかにした。さらに、育児時間やホームスクーリングに関しては夫妻ともに自身がオフィス勤務をしている場合のみ長くなる確率が減少し、配偶者の働き方は影響しないことを示した。また、Sevilla and Smith (2020) はイギリスのデータを用いてロックダウン後の夫妻の育児時間の変化について分析した。その結果、ロックダウン後も妻が主に育児を担っているものの、コロナ禍以前と比べて夫妻間の育児時間のシェアが縮まっていることを明らかにした。また、夫が在宅勤務や休職中・失業中であった場合、育児時間の夫妻間の配分がより平等になることを示した。

既存研究ではテレワークと生活時間の変化に言及しているが、テレワークを行うことによってどの程度、理想とする生活時間と実際の生活時間の乖離が縮小するか、あるいは拡大するかという点については言及されていない。「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」では、ワーク・ライフ・バランスが実現した社会を「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会²⁾」としており、テレワーク勤務によって理想とする生活時間をどの程度まで達成できるかを明らかにすることは、テレワーク勤務によるワーク・ライフ・バランス達成の効果を評価する上で重要であろう。本論文で用いるアンケート調査は睡眠時間、労働時間、家事時間、育児・介護時間、自由時間に関して実際の生活時間と理想とする生活時間を訊いているため、この点を分析することが可能である。そこで、本論文ではテレワーク勤務によって実際の生活時間と理想とする生活時間との乖離にどのような影響があるか究明する。

本論文の構成は以下の通りである。Ⅱでは本論文で用いるデータについて述べた上で記述統計量を概観する。Ⅲでは夫妻のテレワーク実施状況と理想と実際の生活時間の乖離の関係について回帰分析を行う。Ⅳではまとめを行う。

2) 内閣府「『仕事と生活の調和』推進サイト」(https://www.cao.go.jp/wlb/government/20barrier_html/20html/charter.html) を参照。

II. 使用データと記述統計量

1. テレワーク勤務と夫妻の生活時間に関する調査

本論文で用いるデータは「テレワーク勤務と夫妻の生活時間に関する調査」である。本調査は JSPS 科学研究費（科研費）基盤研究（C）「テレワーク制度が夫妻の生活時間配分・生活満足度に与える影響に関する計量分析」の一環として実施した調査であり、テレワークの推進によって労働時間、家事時間をはじめとする生活時間や、夫妻間における生活時間の配分がどのように変化したか、そして、それは各個人が理想とする生活時間や生活時間配分との乖離をどの程度縮めたか、について明らかにすることを目的とする。本調査では調査時点における回答者とその配偶者の実際の生活時間（睡眠時間、労働時間、家事時間、育児・介護時間、自由時間）に加えて、回答者とその配偶者が理想とする生活時間に関する情報も収集している³⁾。テレワーク勤務によって実際の生活時間と理想の生活時間の乖離が縮まるか否かは、テレワーク制度導入によるワーク・ライフ・バランスに対する効果を評価する上で重要である。しかしながら、代表的な調査（例えば、社会生活基本調査、全国家庭動向調査、日本家計パネル調査（JHPS/KHPS））では、生活時間について詳細な情報が得られるものの、妻自身あるいは夫自身が可能ならばどの程度、家事時間や育児時間に費やしたいか、という点について把握できない。本調査を用いることで、テレワーク勤務による実際の生活時間と理想とする生活時間の乖離への影響について分析することができる。これが、本調査の新規性である。

本調査の調査対象は、①調査時点で 25～59 歳、②配偶者・パートナーがいる（事実上の内縁関係にある者も含む）、③2020 年 4 月 1 日時点で少なくとも回答者本人あるいは配偶者・パートナーのどちらか一方が収入を伴う仕事をしていた、の 3 点を満たす全国の男女である。本調査はインターネット調査であり、インターネット調査会社に委託して 2022 年 1 月 20 日から 1 月 21 日に実施した。回答者数は 2483 人である。本論文の分析対象は①2020 年 4 月 1 日時点で配偶者あるいはパートナーがいた者、②調査時点で共働き世帯であること、の 2 点を満たすサンプルであり、最終的なサンプルサイズは 1669 人である。

Del Boca *et al.* (2020) や Sevilla and Smith (2020) が示したように、特に夫の家事時間や育児時間は配偶者の勤務形態に影響を受ける。したがって、テレワークと生活時間の変化の関係を検証する際には配偶者のテレワーク実施状況を考慮する必要がある。そこで、調査時点における夫妻のテレワーク実施状況を①夫妻どちらもテレワーク実施、②夫のみテレワーク実施、③妻のみテレワーク実施、④夫妻のどちらもテレワークなし、の 4 カテゴリーに分類し、このカテゴリ間で理想の生活時間と実際の生活時間との乖離について比較する。変数の記述統計量は表 1 の通りである。夫妻のテレワーク実施状況に関して、調査時点において夫妻のどちらもテレワークをしていない夫妻の割合が最も高く、全体の 70.2% を占める。次いで、14.6% の夫妻が調査時点で夫のみテレワークを実施している。また、表には示していないが、テレワークをしている夫のうち、主として在宅勤務をしている者は 89.6%、サテライト勤務をしている者は 6.3%、モバイル勤務をしている者は 4.1% である。また、テレワークをしている妻のうち、主として在宅勤務をしている者は 88.5%、サテライト勤務をしている者は 8.3%、モバイル勤務を

³⁾ 配偶者に関する回答については、アンケート回答者がわかる範囲で記入している。

表1 記述統計量

	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
夫妻のテレワーク実施状況			居住都市圏		
夫妻どちらも実施	0.106	0.308	東京圏	0.307	0.461
夫のみ実施	0.146	0.353	名古屋圏	0.090	0.287
妻のみ実施	0.046	0.210	大阪圏	0.153	0.360
どちらも実施なし	0.702	0.458	その他の地域	0.450	0.498
末子が小学生以下	0.410	0.492	夫は外で仕事をし、妻は家事・育児を担うべきだ		
			あてはまる	0.144	0.352
夫の年齢	45.067	9.112	どちらともいえない	0.431	0.495
妻の年齢	43.330	8.730	あてはまらない	0.425	0.494
夫が大卒以上	0.576	0.494	夫は妻の家事・育児を手伝うべきだと思う		
妻が大卒以上	0.372	0.484	あてはまる	0.447	0.497
			どちらともいえない	0.386	0.487
夫の雇用形態			あてはまらない	0.167	0.373
正社員	0.949	0.220	夫は主体的に家事・育児を担うべきだと思う		
非正規	0.051	0.220	あてはまる	0.290	0.454
妻の雇用形態			どちらともいえない	0.514	0.500
正社員	0.379	0.485	あてはまらない	0.196	0.397
非正規	0.621	0.485			
夫の休職の有無	0.008	0.091	男性回答者	0.539	0.499
妻の休職の有無	0.049	0.216	女性回答者	0.461	0.499
標本サイズ	1669				

している者は3.2%である。夫妻どちらの場合もテレワーク勤務者の大部分が在宅勤務者である⁴⁾。

価値観に関する変数について、「夫は外で仕事をし、妻は家事・育児を担うべきだ」という価値観にあてはまらない者の割合は42.5%である。その一方、「夫は主体的に家事・育児を担うべきだと思う」にあてはまる者の割合は29%であり、伝統的な性別役割分業に反対する割合が高いものの、夫が主体的に家事・育児を行うことに関しては積極的に考えていないことが示唆される。

2. 夫妻のテレワーク実施状況と理想の生活時間、実際の生活時間

本項では実証分析を行う前に、夫妻のテレワーク実施状況別に理想の生活時間と実際の生活時間について記述統計量を概観する。表2（夫）、表3（妻）には夫妻のテレワーク実施状況別に、生活時間（睡眠時間、労働時間、家事時間、自由時間）に関して、①理想よりも実際の生活時間が長い者の割合（表中の「理想<実際」）、②理想と実際の生活時間が一致している者の割合（表中の「理想=実際」）、③理想よりも実際の生活時間が短い者の割合（表中の「理想>実際」）を示した。

4) モバイル勤務とは「移動中（交通機関の車内など）や顧客先、カフェなどを就業場所とする働き方」である。また、サテライト勤務とは「所属するオフィス以外の他のオフィスや遠隔勤務用の施設を就業場所とする働き方」である。（厚生労働省「働き方・休み方改善ポータルサイト」（<https://work-holiday.mhlw.go.jp/telework/>）を参照）

まずは、夫の生活時間について概観しよう。睡眠時間は夫全体の57.1%が理想より短いと解答しており、睡眠不足だと感じている。テレワーク実施状況別に比較すると、最も理想と実際の睡眠時間が一致している割合が高いのは夫妻どちらもテレワークを実施している世帯の夫であり、その割合は42.4%である。労働時間は理想よりも長いと感じている者の割合が高く、サンプル全体では54.8%を占める。夫妻のテレワーク実施状況別にみると、最も理想と実際の労働時間が一致している割合が高いのは夫妻どちらもテレワークを実施している世帯の夫（48%）であり、夫妻どちらもテレワークを実施していない世帯の夫（41.7%）と比べて6.3%ポイント、理想と実際の労働時間が一致している割合が高い。家事時間に関しては、いずれのテレワーク実施状況でも理想と実際の家事時間が一致している割合が最も高く、全体では50.5%を占める。ただし、妻がテレワークをしている場合（夫妻どちらもテレワーク実施、妻のみテレワーク実施）、夫妻どちらもテレワークをしていない場合と比べて実際の家事時間が理想よ

表2 テレワーク実施状況別・理想の生活時間と実際の生活時間との乖離の分布（夫）

	睡眠時間			労働時間		
	理想<実際	理想=実際	理想>実際	理想<実際	理想=実際	理想>実際
夫妻どちらもテレワーク実施	0.068 (0.252)	0.424 (0.496)	0.508 (0.501)	0.475 (0.501)	0.480 (0.501)	0.045 (0.208)
夫のみテレワーク実施	0.045 (0.208)	0.357 (0.480)	0.598 (0.491)	0.578 (0.495)	0.389 (0.489)	0.033 (0.178)
妻のみテレワーク実施	0.026 (0.160)	0.377 (0.488)	0.597 (0.494)	0.584 (0.496)	0.390 (0.491)	0.026 (0.160)
夫妻どちらもテレワークなし	0.032 (0.177)	0.395 (0.489)	0.573 (0.495)	0.550 (0.498)	0.417 (0.493)	0.033 (0.180)
全体	0.038 (0.191)	0.391 (0.488)	0.571 (0.495)	0.548 (0.498)	0.418 (0.493)	0.034 (0.182)
標本サイズ	1669					
	家事時間			自由時間		
	理想<実際	理想=実際	理想>実際	理想<実際	理想=実際	理想>実際
夫妻どちらもテレワーク実施	0.237 (0.427)	0.446 (0.499)	0.316 (0.466)	0.305 (0.462)	0.305 (0.462)	0.390 (0.489)
夫のみテレワーク実施	0.139 (0.347)	0.512 (0.501)	0.348 (0.477)	0.402 (0.491)	0.266 (0.443)	0.332 (0.472)
妻のみテレワーク実施	0.247 (0.434)	0.442 (0.500)	0.312 (0.466)	0.247 (0.434)	0.312 (0.466)	0.442 (0.500)
夫妻どちらもテレワークなし	0.137 (0.345)	0.517 (0.500)	0.346 (0.476)	0.418 (0.494)	0.266 (0.442)	0.316 (0.465)
全体	0.153 (0.360)	0.505 (0.500)	0.342 (0.474)	0.396 (0.489)	0.272 (0.445)	0.332 (0.471)
標本サイズ	1669					

注）表中の括弧内は標準偏差である。表中の「理想<実際」は理想よりも実際の生活時間が長いこと、「理想=実際」は理想と実際の生活時間が一致していること、「理想>実際」は理想よりも実際の生活時間が短いことを表している。

り長いと考える割合が10%ポイント程度高い。自由時間に関しては実際の自由時間が理想よりも長いという回答が全体サンプルの39.6%を占める。その一方、夫妻どちらもテレワーク実施の場合は7.4%ポイント、妻のみテレワーク実施の場合は12.6%ポイント、夫妻双方在テレワークをしていない場合と比べて実際の自由時間が理想よりも短いと回答する割合が高い。両者は自身の理想よりも長い時間家事をしている割合が高く、夫妻双方在テレワークをしていない世帯や夫のみテレワークをしている世帯と比べて自身が多く家事をしていると感じるため、その分、自由時間が少ないと考えている可能性がある。

次に、妻の生活時間について概観しよう。睡眠時間に関して、全体的に睡眠不足と感じる割合が高いという点、夫妻ともにテレワークをしている世帯の妻において理想と実際の睡眠時間が一致している割合が高い点については、夫と同様の傾向である。労働時間に関しては、夫と比較して実際の労働時間が理想より長いと回答した割合が低く（全体で32.1%）、理想と実際の労働時間が一致すると回答した割合が高い（全体で51.9%）。理想と実際の労働時間が一致する割合が最も高いのは妻のみテレワークをしている場合であり、その割合は54.5%である。家事時間に関しては、実際の家事時間が理想より長いと回答する者の割合が

表3 テレワーク実施状況別・理想の生活時間と実際の生活時間との乖離の分布（妻）

	睡眠時間			労働時間		
	理想<実際	理想=実際	理想>実際	理想<実際	理想=実際	理想>実際
夫妻どちらもテレワーク実施	0.102 (0.303)	0.418 (0.495)	0.480 (0.501)	0.350 (0.478)	0.492 (0.501)	0.158 (0.366)
夫のみテレワーク実施	0.037 (0.189)	0.336 (0.473)	0.627 (0.485)	0.295 (0.457)	0.529 (0.500)	0.176 (0.382)
妻のみテレワーク実施	0.039 (0.195)	0.325 (0.471)	0.636 (0.484)	0.338 (0.476)	0.545 (0.501)	0.117 (0.323)
夫妻どちらもテレワークなし	0.035 (0.184)	0.385 (0.487)	0.580 (0.494)	0.321 (0.467)	0.519 (0.500)	0.160 (0.366)
全体	0.043 (0.202)	0.379 (0.485)	0.579 (0.494)	0.321 (0.467)	0.519 (0.500)	0.160 (0.367)
標本サイズ	1669					
	家事時間			自由時間		
	理想<実際	理想=実際	理想>実際	理想<実際	理想=実際	理想>実際
夫妻どちらもテレワーク実施	0.424 (0.496)	0.350 (0.478)	0.226 (0.419)	0.237 (0.427)	0.288 (0.454)	0.475 (0.501)
夫のみテレワーク実施	0.443 (0.498)	0.385 (0.488)	0.172 (0.378)	0.357 (0.480)	0.246 (0.432)	0.398 (0.490)
妻のみテレワーク実施	0.519 (0.503)	0.390 (0.491)	0.091 (0.289)	0.260 (0.441)	0.325 (0.471)	0.416 (0.496)
夫妻どちらもテレワークなし	0.466 (0.499)	0.402 (0.491)	0.132 (0.338)	0.280 (0.449)	0.254 (0.435)	0.466 (0.499)
全体	0.461 (0.499)	0.394 (0.489)	0.146 (0.353)	0.286 (0.452)	0.259 (0.438)	0.455 (0.498)
標本サイズ	1669					

注）表中の括弧内は標準偏差である。表中の「理想<実際」は理想よりも実際の生活時間が長いこと、「理想=実際」は理想と実際の生活時間が一致していること、「理想>実際」は理想よりも実際の生活時間が短いことを表している。

表4 テレワーク実施状況別・理想の育児時間と実際の育児時間との乖離の分布
（末子が小学生以下の回答者）

	夫の育児時間			妻の育児時間		
	理想<実際	理想=実際	理想>実際	理想<実際	理想=実際	理想>実際
夫妻どちらもテレワーク実施	0.312 (0.466)	0.286 (0.455)	0.403 (0.494)	0.468 (0.502)	0.364 (0.484)	0.169 (0.377)
夫のみテレワーク実施	0.102 (0.305)	0.375 (0.487)	0.523 (0.502)	0.489 (0.503)	0.409 (0.494)	0.102 (0.305)
妻のみテレワーク実施	0.071 (0.262)	0.286 (0.460)	0.643 (0.488)	0.393 (0.497)	0.393 (0.497)	0.214 (0.418)
夫妻どちらもテレワークなし	0.175 (0.380)	0.415 (0.493)	0.409 (0.492)	0.507 (0.500)	0.338 (0.474)	0.155 (0.362)
全体	0.177 (0.382)	0.39 (0.488)	0.433 (0.496)	0.496 (0.500)	0.352 (0.478)	0.152 (0.359)
標本サイズ	684					

注）表中の括弧内は標準偏差である。表中の「理想<実際」は理想よりも実際の生活時間が長いこと、「理想=実際」は理想と実際の生活時間が一致していること、「理想>実際」は理想よりも実際の生活時間が短いことを表している。

夫より高く、全体では46.1%を占める。なお、夫妻のテレワーク実施状況別にみると、夫妻どちらもテレワークを実施している場合、他のテレワーク実施状況にある世帯の妻と比べて実際の家事時間が理想より短いと回答する割合が高い。夫は自身の理想よりも家事負担が大きいと感じている割合が高かったことから、夫妻双方がテレワーク勤務だと両方で家事分担を行うことにより、妻の家事負担が他のテレワーク実施状況の世帯よりも軽くなった可能性がある。自由時間に関しては、サンプル全体の45.5%が実際の自由時間が理想よりも短いと回答しており、夫と比べて自由時間が十分に取れていないと感じている者の割合が高い。

表4には末子が小学生以下の子をもつ回答者にサンプルを限定した上で、育児・介護時間について表2、表3と同様にまとめた。全体の傾向として、夫は理想と実際の育児時間が一致している回答者の割合と実際の育児時間が理想より短い回答者の割合が妻のそれよりも高い。特に、夫のみテレワークをしている場合は52.3%、妻のみテレワークをしている場合は64.3%の夫が理想よりも実際の育児時間が短いと回答しており、夫妻ともにテレワークを実施していない場合と比べて10%ポイント以上高い。

その一方、妻の場合、全体の49.6%が理想よりも実際の育児時間が長いと回答している。ただし、テレワーク実施状況別にみると、夫妻のどちらか、あるいは双方がテレワークをしている場合、夫妻ともにテレワークをしていない場合と比べて実際の育児時間が理想より長いと回答した割合は低く、理想と実際の育児時間が一致していると回答した割合が高い。

Ⅲ. 回帰分析

1. 共働き世帯における理想の生活時間と実際の生活時間との乖離に関する分析

前章において、夫妻の理想とする生活時間と実際の生活時間の乖離をテレワーク実施状況別に確認した。本章では個人の属性をコントロールした上で、夫妻のテレワーク勤務の状況、理想の生活時間と実

際の生活時間との乖離の関係を、線形確率モデルを用いて分析する。推定結果は表5、表6の通りである。被説明変数は①理想よりも実際の生活時間が長ければ1、それ以外なら0をとるダミー変数（表中の「理想<実際」）、②理想と実際の生活時間が一致していれば1、それ以外なら0をとるダミー変数（表中の「理想=実際」）、③理想よりも実際の生活時間が短ければ1、それ以外なら0をとるダミー変数（表中の「理想>実際」）である。主たる説明変数は夫妻のテレワーク実施状況である（夫妻どちらもテレワーク実施、夫のみテレワーク実施、妻のみテレワーク実施、夫妻どちらもテレワークなし。ベースカテゴリは夫妻どちらもテレワークなし）。コントロール変数は夫の年齢、妻の年齢、夫大卒以上ダミー、妻大卒以上ダミー、夫の雇用形態（正規雇用、非正規雇用）、妻の雇用形態（カテゴリは夫の雇用形態と同じ）、居住都市圏（東京圏、名古屋圏、大阪圏、その他地域）、夫の休職の有無、妻の休職の有無、末子が小学生以下ダミー、回答者が女性ダミー、夫妻の家事・育児分担の価値観の変数である⁵⁾。

まずは、夫の分析結果（表5）に注目する。夫妻ともにテレワークをしている場合、夫妻ともにテレワークをしていない場合と比べ、睡眠時間、労働時間は理想と実際との乖離が縮小している。具体的にみて

表5 夫妻のテレワーク経験と夫の理想とする生活時間と実際の生活時間との乖離に関する分析

生活時間	睡眠時間			労働時間		
	(1)理想<実際	(2)理想=実際	(3)理想>実際	(4)理想<実際	(5)理想=実際	(6)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.0446** (0.0192)	0.0471 (0.0431)	-0.0917** (0.0435)	-0.102** (0.0435)	0.103** (0.0433)	-0.000540 (0.0163)
夫のみテレワーク実施	0.0306** (0.0156)	-0.0125 (0.0353)	-0.0181 (0.0360)	0.0116 (0.0371)	-0.0103 (0.0364)	-0.00135 (0.0133)
妻のみテレワーク実施	-0.00457 (0.0180)	-0.0179 (0.0585)	0.0225 (0.0588)	0.0122 (0.0575)	0.00249 (0.0566)	-0.0147 (0.0209)
定数項	-0.000181 (0.0152)	-0.0669* (0.0386)	0.0671* (0.0389)	-0.00646 (0.0393)	0.0159 (0.0389)	-0.00948 (0.0142)
標本サイズ	1669	1669	1669	1669	1669	1669
決定係数	0.031	0.021	0.029	0.017	0.022	0.025

生活時間	家事時間			自由時間		
	(7)理想<実際	(8)理想=実際	(9)理想>実際	(10)理想<実際	(11)理想=実際	(12)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.0774** (0.0349)	-0.0460 (0.0429)	-0.0315 (0.0402)	-0.119*** (0.0399)	0.0364 (0.0400)	0.0826** (0.0421)
夫のみテレワーク実施	-0.00859 (0.0259)	0.00397 (0.0372)	0.00461 (0.0355)	-0.0114 (0.0367)	-0.00566 (0.0333)	0.0171 (0.0344)
妻のみテレワーク実施	0.108** (0.0497)	-0.0530 (0.0583)	-0.0555 (0.0537)	-0.184*** (0.0525)	0.0572 (0.0549)	0.127** (0.0597)
定数項	-0.0108 (0.0284)	0.0283 (0.0392)	-0.0174 (0.0372)	0.0601 (0.0390)	-0.0450 (0.0345)	-0.0151 (0.0370)
標本サイズ	1669	1669	1669	1669	1669	1669
決定係数	0.044	0.028	0.035	0.033	0.021	0.029

注) ***は1%水準、**は5%水準、*は10%水準で有意であることを示す。また、括弧内は不均一分散に対して頑健な標準誤差である。説明変数として夫の年齢、妻の年齢、夫大卒以上ダミー、妻大卒以上ダミー、夫の雇用形態、妻の雇用形態、居住都市圏、末子が小学生以下ダミー、夫の休職の有無、妻の休職の有無、回答者が女性ダミー、夫妻の家事・育児分担に関する価値観をコントロールしている。

⁵⁾ 「夫は外で仕事をし、妻は家事・育児を担うべきだ」、「夫は妻の家事・育児を手伝うべきだと思う」、「夫は主体的に家事・育児を担うべきだと思う」という3つの価値観について、それぞれ「あてはまる」、「どちらでもない」、「あてはまらない」という3段階の指標をコントロールした。

いくと、夫妻ともにテレワークをしている場合、夫妻ともにテレワークをしていない場合と比べて実際の睡眠時間が理想より短い確率は9.17%ポイント減少する。その一方、実際の睡眠時間が理想より長い確率は4.46%ポイント高まる。また、非有意ではあるものの理想と実際の睡眠時間が一致する確率はプラスである。労働時間に関しては、実際の労働時間が理想よりも長い確率は10.2%ポイント減少、理想と実際の労働時間が一致する確率は10.3%ポイント上昇する。このように、夫妻ともにテレワークをしている場合、夫の睡眠不足の状況やオーバーワークだと感じる状況は改善している。家事時間に関しては、夫妻どちらもテレワークをしている場合に理想と実際の時間が一致する確率が非有意でマイナスである一方、実際の家事時間が理想よりも長い確率は7.74%ポイント有意に高まっている。妻のみテレワークをしている場合もほぼ同様の結果である。自由時間に関して、実際の自由時間が理想よりも長い確率は夫妻どちらもテレワークをしている世帯の夫で11.9%ポイント、妻のみテレワークをしている世帯の夫で18.4%ポイント、減少している。その一方、実際の自由時間が理想より短い確率は、夫妻どちらもテレワークをしている世帯の夫で8.26%ポイント、妻のみテレワークをしている世帯の夫で12.7%ポイントの上昇である。また、理想と実際の自由時間が一致する確率は非有意ではあるものの、プラスである。夫妻ともにテレワークをしている世帯と妻のみテレワークをしている世帯の夫はどちらも理想よりも長く家事を負担していると考えており、このことによって実際の自由時間が理想よりも短いことに繋がっている可能性がある。

表6 夫妻のテレワーク経験と妻の理想とする生活時間と実際の生活時間との乖離に関する分析

生活時間	睡眠時間			労働時間		
	(1)理想<実際	(2)理想=実際	(3)理想>実際	(4)理想<実際	(5)理想=実際	(6)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.0616*** (0.0233)	0.0455 (0.0428)	-0.107** (0.0436)	-0.00206 (0.0408)	0.00203 (0.0434)	0.0000296 (0.0298)
夫のみテレワーク実施	0.000349 (0.0151)	-0.0456 (0.0352)	0.0452 (0.0362)	-0.0109 (0.0337)	0.0231 (0.0366)	-0.0122 (0.0273)
妻のみテレワーク実施	0.00271 (0.0241)	-0.0487 (0.0556)	0.0460 (0.0572)	-0.0174 (0.0550)	0.0472 (0.0586)	-0.0298 (0.0370)
定数項	0.0130 (0.0169)	-0.0564 (0.0379)	0.0434 (0.0387)	-0.0272 (0.0358)	0.0384 (0.0397)	-0.0111 (0.0294)
標本サイズ	1669	1669	1669	1669	1669	1669
決定係数	0.036	0.016	0.022	0.045	0.023	0.063

生活時間	家事時間			自由時間		
	(7)理想<実際	(8)理想=実際	(9)理想>実際	(10)理想<実際	(11)理想=実際	(12)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	-0.0198 (0.0428)	-0.0772* (0.0407)	0.0970*** (0.0347)	-0.0365 (0.0371)	0.0232 (0.0391)	0.0133 (0.0427)
夫のみテレワーク実施	-0.0336 (0.0368)	-0.00673 (0.0362)	0.0403 (0.0275)	0.0625* (0.0354)	0.000726 (0.0321)	-0.0632* (0.0362)
妻のみテレワーク実施	0.0561 (0.0591)	-0.0211 (0.0569)	-0.0351 (0.0359)	-0.00986 (0.0520)	0.0729 (0.0551)	-0.0631 (0.0594)
定数項	-0.0330 (0.0393)	0.0445 (0.0381)	-0.0114 (0.0273)	0.0476 (0.0355)	0.00709 (0.0341)	-0.0547 (0.0393)
標本サイズ	1669	1669	1669	1669	1669	1669
決定係数	0.035	0.036	0.025	0.037	0.018	0.045

注) ***は1%水準、**は5%水準、*は10%水準で有意であることを示す。また、括弧内は不均一分散に対して頑健な標準誤差である。説明変数は表5と同様である。

次に、妻の結果についてみていこう。夫妻ともにテレワークをしている場合、睡眠時間に関しては夫の分析結果と同様の傾向がみられる。夫妻ともにテレワークをしている場合、夫妻ともにテレワークをしていない場合と比べて実際の睡眠時間が理想よりも長い確率は6.16%ポイント上昇し、理想と実際の時間が一致する確率は非有意ではあるがプラスである。その一方、実際の睡眠時間が理想よりも短い確率は10.7%ポイントの減少であり、妻の睡眠時間は不足している状態から理想と実際との乖離が縮小している。一方、家事時間に関して、夫妻ともにテレワークをしている場合、理想と実際の家事時間が一致する確率は7.72%ポイントの減少、実際の家事時間が理想よりも短い確率は9.7%ポイントの上昇であり、夫の分析結果とは反対の結果である。表5の分析より夫妻ともにテレワークをしている世帯の夫の家事負担は重くなっており、夫妻が2人でテレワークを取得することにより家事分担が進み、妻の家事負担が軽くなった可能性がある。

2. 小学生以下の子どもをもつ夫妻の理想の生活時間と実際の生活時間との乖離

本項では夫妻のテレワーク勤務の状況と育児時間の関係を検証するため、末子が小学生以下である回答者にサンプルを限定して分析を行った。表7は夫の分析結果、表8は妻の分析結果である。表7、表8では末子が小学生以下である回答者に限定した分析のほか、末子が6歳未満である回答者に限定した分析も行った。妻の育児時間に関しては、いずれのテレワーク実施状況であっても夫妻ともにテレワークをしていない場合と有意な差はない。

末子が小学生以下の夫の育児時間に関して、夫妻ともにテレワークをしていない場合と比べ、夫妻ともにテレワークをしている場合は理想と実際の育児時間が一致する確率が12.6%ポイント低く、理想よりも実際の育児時間が長い確率が11.5%ポイント高い。夫妻ともにテレワークをしている場合、夫の育児時間は理想よりも長い傾向にある。その一方、夫のみテレワークをしている場合や妻のみテレワークをしている場合は、実際の育児時間が理想よりも短い傾向にある⁶⁾。末子に6歳未満の子がいる場合に関しては、妻のみテレワークをしている場合、夫妻ともにテレワークをしていない場合と比べて実際の育児時間が理想よりも短い確率が24.7%ポイント上昇し、理想と実際の育児時間が一致する確率が16%ポイント減少する。その他のテレワーク実施状況では夫妻ともにテレワークをしていない場合との有意差はない。

さらに、全体サンプルの結果と比較するためにその他の生活時間に関しても末子が小学生以下のサンプルと末子が6歳未満のサンプルに限定した分析を行った。夫の分析(表9)に関しては、いずれの生活時間においても全体サンプルの分析結果と大きな差はない。

妻の家事時間に関して、末子が小学生以下の場合は全体の分析結果と大きな差はない。しかし、末子が6歳未満の場合において、いずれのテレワーク勤務状況であっても夫妻ともにテレワークをしない場合と比べて理想よりも長い時間、家事をする方向へ理想と実際との乖離が拡大している。夫妻ともにテレワーク勤務をしている場合は理想と実際の家事時間が一致する確率が25.5%ポイント減少し、実際の

⁶⁾ 本論文で用いたアンケート調査では、「食事の準備・後片付け」、「部屋の掃除・風呂掃除」、「日用品の買い出し」、「ゴミ捨て」、「洗濯・洗濯物の取り込み」、「食事の献立を考える」、「子どもの遊び相手になる」、「子どもの面倒をみる」の8項目について、2019年12月以前と比べて負担がどの程度変化したか訊いている。末子が小学生以下のサンプルに限定すると、夫妻ともにテレワークをしている世帯の夫は食事の献立を考える機会が2019年12月以前と比べて増えているという回答が22.1%を占める。その一方、夫のみテレワークをしている世帯の夫では17%、妻のみテレワークをしている世帯の夫では10.7%に留まる。このような負担の大きな家事・育児を夫妻ともにテレワークをしている夫が担うことが多くなったことが1つの理由と考えられる。

表7 夫妻のテレワーク経験と理想とする育児時間と実際の育児時間との乖離
（夫・末子が小学生以下のサンプル）

育児時間	末子が小学生以下			末子が6歳未満		
	(1)理想<実際	(2)理想=実際	(3)理想>実際	(4)理想<実際	(5)理想=実際	(6)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.115* (0.0589)	-0.126** (0.0624)	0.0109 (0.0638)	0.0413 (0.0736)	-0.0759 (0.0851)	0.0346 (0.0865)
夫のみテレワーク実施	-0.0685* (0.0400)	-0.0476 (0.0615)	0.116* (0.0614)	-0.0627 (0.0690)	-0.0382 (0.0907)	0.101 (0.0922)
妻のみテレワーク実施	-0.114** (0.0550)	-0.114 (0.0886)	0.228** (0.0933)	-0.0871 (0.100)	-0.160* (0.0929)	0.247** (0.120)
定数項	0.609*** (0.113)	0.249* (0.148)	0.143 (0.145)	0.426** (0.180)	0.367* (0.215)	0.207 (0.214)
標本サイズ	684	684	684	362	362	362
決定係数	0.070	0.051	0.062	0.055	0.069	0.084

注）***は1％水準，**は5％水準，*は10％水準で有意であることを示す。また、括弧内は不均一分散に対して頑健な標準誤差である。説明変数は表5と同様である。

表8 夫妻のテレワーク経験と理想とする育児時間と実際の育児時間との乖離
（妻・末子が小学生以下のサンプル）

育児時間	末子が小学生以下			末子が6歳未満		
	(1)理想<実際	(2)理想=実際	(3)理想>実際	(4)理想<実際	(5)理想=実際	(6)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	-0.0138 (0.0654)	-0.00812 (0.0642)	0.0219 (0.0473)	-0.0644 (0.0903)	0.0200 (0.0858)	0.0444 (0.0623)
夫のみテレワーク実施	-0.0279 (0.0618)	0.0742 (0.0599)	-0.0463 (0.0378)	0.0673 (0.0899)	-0.0229 (0.0807)	-0.0444 (0.0516)
妻のみテレワーク実施	-0.119 (0.0935)	0.0465 (0.0919)	0.0721 (0.0801)	-0.161 (0.139)	0.0107 (0.115)	0.151 (0.123)
定数項	0.754*** (0.148)	0.283** (0.143)	-0.0370 (0.109)	0.623*** (0.215)	0.355* (0.210)	0.0216 (0.155)
標本サイズ	684	684	684	362	362	362
決定係数	0.046	0.042	0.023	0.063	0.077	0.030

注）***は1％水準，**は5％水準，*は10％水準で有意であることを示す。また、括弧内は不均一分散に対して頑健な標準誤差である。説明変数は表5と同様である。

家事時間が理想よりも長い確率が23.2%ポイント上昇する。同様に、夫のみテレワーク勤務の場合は理想と実際の家事時間が一致する確率が25.6%ポイントの減少、実際の家事時間が理想よりも長い確率は15.4%ポイントの上昇である。そして、妻のみテレワーク勤務の場合は理想と実際の家事時間が一致する確率が非有意ではあるが17.7%ポイントの減少、実際の家事時間が理想よりも長い確率は32.2%ポイントの上昇である。

育児時間以外の生活時間に関して、末子が小学生以下の夫であっても全体サンプルの分析結果とほぼ変わらない。その一方、特に末子が6歳未満の場合において夫妻のどちらか一方あるいは双方がテレワーク勤務を行っている場合、妻は自身が理想とするよりも長時間、家事を行っている傾向にある。このことは、たとえ夫がテレワーク勤務により在宅時間が長かったとしても、子どもが幼いうちの妻の家事負担感は重いことを示唆している。

表9 夫妻のテレワーク経験と理想とする生活時間と実際の生活時間との乖離
(夫・末子が小学生以下の回答者)

(a)末子が小学生以下

生活時間	睡眠時間			労働時間		
	(1)理想<実際	(2)理想=実際	(3)理想>実際	(4)理想<実際	(5)理想=実際	(6)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.0904** (0.0371)	0.0271 (0.0645)	-0.118* (0.0654)	-0.132** (0.0654)	0.131** (0.0660)	0.00113 (0.0281)
夫のみテレワーク実施	0.0712** (0.0350)	-0.0642 (0.0574)	-0.00704 (0.0598)	0.0194 (0.0633)	-0.0160 (0.0623)	-0.00343 (0.0264)
妻のみテレワーク実施	-0.00795 (0.0363)	0.0184 (0.101)	-0.0104 (0.103)	-0.0418 (0.0940)	0.0490 (0.0916)	-0.00717 (0.0345)
定数項	0.197** (0.0839)	0.308** (0.147)	0.494*** (0.150)	0.299** (0.149)	0.601*** (0.147)	0.1000 (0.0759)
標本サイズ	684	684	684	684	684	684
決定係数	0.062	0.024	0.039	0.028	0.032	0.035

生活時間	家事時間			自由時間		
	(7)理想<実際	(8)理想=実際	(9)理想>実際	(10)理想<実際	(11)理想=実際	(12)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.0765 (0.0554)	-0.0346 (0.0654)	-0.0419 (0.0636)	-0.0662 (0.0578)	0.143** (0.0660)	-0.0767 (0.0613)
夫のみテレワーク実施	0.0274 (0.0492)	0.0289 (0.0616)	-0.0563 (0.0578)	-0.0405 (0.0548)	0.0442 (0.0568)	-0.00371 (0.0610)
妻のみテレワーク実施	0.172** (0.0868)	-0.119 (0.0930)	-0.0527 (0.0910)	0.0342 (0.0892)	0.180* (0.0979)	-0.214** (0.0852)
定数項	0.249** (0.117)	0.488*** (0.146)	0.263* (0.143)	0.246* (0.128)	0.520*** (0.139)	0.234* (0.142)
標本サイズ	684	684	684	684	684	684
決定係数	0.059	0.043	0.051	0.049	0.068	0.060

(b)末子が6歳未満

生活時間	睡眠時間			労働時間		
	(1)理想<実際	(2)理想=実際	(3)理想>実際	(4)理想<実際	(5)理想=実際	(6)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.133** (0.0603)	0.00173 (0.0846)	-0.134 (0.0865)	-0.132 (0.0885)	0.169* (0.0896)	-0.0370 (0.0302)
夫のみテレワーク実施	0.0905 (0.0569)	0.00296 (0.0895)	-0.0935 (0.0897)	-0.0397 (0.0953)	0.0428 (0.0943)	-0.00302 (0.0355)
妻のみテレワーク実施	-0.0629** (0.0250)	-0.0880 (0.137)	0.151 (0.140)	0.0641 (0.130)	-0.0156 (0.126)	-0.0485** (0.0223)
定数項	0.128 (0.142)	0.420* (0.215)	0.453** (0.224)	0.104 (0.220)	0.715*** (0.219)	0.181 (0.118)
標本サイズ	362	362	362	362	362	362
決定係数	0.080	0.038	0.059	0.048	0.048	0.064

生活時間	家事時間			自由時間		
	(7)理想<実際	(8)理想=実際	(9)理想>実際	(10)理想<実際	(11)理想=実際	(12)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.125 (0.0776)	-0.0504 (0.0876)	-0.0749 (0.0868)	-0.0690 (0.0843)	-0.0627 (0.0814)	0.132 (0.0893)
夫のみテレワーク実施	0.126 (0.0834)	0.00541 (0.0919)	-0.131 (0.0832)	0.0166 (0.0932)	-0.0889 (0.0809)	0.0723 (0.0857)
妻のみテレワーク実施	0.167 (0.117)	-0.125 (0.135)	-0.0415 (0.134)	-0.276** (0.109)	0.155 (0.133)	0.122 (0.139)
定数項	0.112 (0.172)	0.491** (0.213)	0.397* (0.212)	0.455** (0.215)	0.198 (0.186)	0.347 (0.215)
標本サイズ	362	362	362	362	362	362
決定係数	0.092	0.053	0.096	0.079	0.060	0.093

注) ***は1%水準, **は5%水準, *は10%水準で有意であることを示す。また、括弧内は不均一分散に対して頑健な標準誤差である。説明変数は表5と同様である。

表 10 夫妻のテレワーク経験と理想とする生活時間と実際の生活時間との乖離
（妻・末子が小学生以下の回答者）

(a)末子が小学生以下						
生活時間	睡眠時間			労働時間		
	(1)理想<実際	(2)理想=実際	(3)理想>実際	(4)理想<実際	(5)理想=実際	(6)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.0708* (0.0388)	0.0532 (0.0647)	-0.124* (0.0677)	-0.00428 (0.0609)	0.0208 (0.0669)	-0.0166 (0.0490)
夫のみテレワーク実施	-0.00341 (0.0298)	-0.0932 (0.0570)	0.0966 (0.0595)	-0.0246 (0.0527)	0.0532 (0.0604)	-0.0286 (0.0503)
妻のみテレワーク実施	0.0630 (0.0592)	-0.0241 (0.0939)	-0.0389 (0.0996)	-0.0580 (0.0860)	0.0567 (0.0969)	0.00134 (0.0714)
定数項	0.127 (0.0831)	0.481*** (0.148)	0.392** (0.152)	0.287** (0.131)	0.516*** (0.149)	0.197 (0.126)
標本サイズ	684	684	684	684	684	684
決定係数	0.048	0.034	0.033	0.058	0.024	0.075

生活時間	家事時間			自由時間		
	(7)理想<実際	(8)理想=実際	(9)理想>実際	(10)理想<実際	(11)理想=実際	(12)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.0260 (0.0640)	-0.173*** (0.0561)	0.147*** (0.0568)	0.0230 (0.0545)	-0.0202 (0.0561)	-0.00281 (0.0643)
夫のみテレワーク実施	0.0226 (0.0607)	-0.0779 (0.0554)	0.0553 (0.0493)	0.0607 (0.0571)	0.0565 (0.0532)	-0.117* (0.0620)
妻のみテレワーク実施	0.174* (0.0946)	-0.0619 (0.0906)	-0.112*** (0.0407)	-0.0841 (0.0611)	0.145 (0.0941)	-0.0605 (0.0967)
定数項	0.317** (0.150)	0.517*** (0.141)	0.167 (0.115)	-0.0904 (0.117)	0.264** (0.126)	0.827*** (0.146)
標本サイズ	684	684	684	684	684	684
決定係数	0.057	0.048	0.059	0.039	0.046	0.058

(b)末子が6歳未満						
生活時間	睡眠時間			労働時間		
	(1)理想<実際	(2)理想=実際	(3)理想>実際	(4)理想<実際	(5)理想=実際	(6)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.0881 (0.0537)	-0.00752 (0.0853)	-0.0806 (0.0906)	0.0253 (0.0847)	-0.00414 (0.0902)	-0.0211 (0.0665)
夫のみテレワーク実施	0.00295 (0.0450)	-0.0836 (0.0830)	0.0806 (0.0885)	-0.0327 (0.0783)	-0.0208 (0.0876)	0.0535 (0.0787)
妻のみテレワーク実施	0.0456 (0.0701)	-0.0478 (0.135)	0.00222 (0.134)	-0.108 (0.124)	0.132 (0.133)	-0.0237 (0.0980)
定数項	0.233* (0.135)	0.526** (0.217)	0.242 (0.225)	0.0847 (0.194)	0.616*** (0.220)	0.300 (0.188)
標本サイズ	362	362	362	362	362	362
決定係数	0.075	0.039	0.038	0.086	0.046	0.115

生活時間	家事時間			自由時間		
	(7)理想<実際	(8)理想=実際	(9)理想>実際	(10)理想<実際	(11)理想=実際	(12)理想>実際
夫妻のテレワーク経験（ベース：夫妻どちらもテレワークなし）						
夫妻どちらもテレワーク実施	0.232*** (0.0796)	-0.255*** (0.0747)	0.0233 (0.0684)	0.0150 (0.0656)	-0.0182 (0.0792)	0.00324 (0.0875)
夫のみテレワーク実施	0.154* (0.0864)	-0.256*** (0.0706)	0.102 (0.0772)	0.0879 (0.0766)	-0.0135 (0.0775)	-0.0743 (0.0894)
妻のみテレワーク実施	0.322*** (0.112)	-0.177 (0.118)	-0.145*** (0.0336)	-0.0223 (0.0948)	0.149 (0.139)	-0.127 (0.144)
定数項	0.587*** (0.212)	0.230 (0.205)	0.184 (0.179)	0.0487 (0.165)	0.107 (0.185)	0.844*** (0.211)
標本サイズ	362	362	362	362	362	362
決定係数	0.127	0.120	0.045	0.054	0.069	0.082

注) ***は1%水準, **は5%水準, *は10%水準で有意であることを示す。また、括弧内は不均一分散に対して頑健な標準誤差である。説明変数は表5と同様である。

IV. おわりに

本論文では、夫妻のテレワーク勤務状況と理想と実際の生活時間の乖離との関係について、独自のアンケート調査を用いて分析を行った。夫妻のテレワーク勤務状況を「夫妻どちらもテレワーク実施」、「夫のみテレワーク実施」、「妻のみテレワーク実施」、「夫妻どちらもテレワークなし」の4つに分類し、共働き世帯を対象に分析した結果、わかったことは次の4点である。

第1に、共働き世帯において夫妻ともにテレワークをしている場合、夫の睡眠時間と労働時間は理想と実際の乖離が縮まり、睡眠不足の状況やオーバーワークとを感じる状況が改善している。睡眠時間に関しては妻も同様の傾向がある。

第2に、共働き世帯において夫妻ともにテレワークをしている場合、夫は実際の家事時間が理想よりも長い傾向があり、妻は実際の家事時間が理想よりも短い傾向にある。双方がテレワークを行うことによりお互いに家事分担をすることで、妻の家事負担が軽くなった可能性がある。

第3に、末子が小学生以下の世帯の夫において、夫妻ともにテレワークをしている場合は夫妻ともにテレワークをしていない場合と比べ、実際の育児時間が理想より長い。その一方、末子が6歳未満の世帯においては、妻のみテレワークをしている世帯の夫を除き、夫妻双方とも理想の育児時間と実際の育児時間の乖離に有意差はない。

第4に、末子が6歳未満の世帯の妻において、夫妻の双方あるいはどちらか一方がテレワーク勤務の場合、理想とするよりも長い時間、家事を行う傾向がある。

以上の点から示唆されることは、次の2点である。第1に、夫妻ともにテレワーク勤務の場合、特に夫に関しては睡眠不足の状態やオーバーワークとを感じる状態が改善されており、テレワーク勤務は一定程度、ワーク・ライフ・バランスの達成に寄与すると考えられる。

第2に、夫妻ともにテレワーク勤務を行っている場合、全体サンプルの分析では夫妻ともにテレワーク勤務の夫の家事負担感が増している一方、子どもが幼いうちは、たとえ夫がテレワーク勤務をしていたとしても、夫妻ともにテレワーク勤務をしていない場合よりも妻の家事負担感が強まる。このことは、子どもが幼いうちの家事負担はいまだ妻に偏重している可能性を示唆しており、夫の家事・育児参加促進にはテレワーク推進以外の政策も併せて行うことが必要だと考えられる。たとえば、近年は男性の育児休業取得促進に向けた取り組み⁷⁾がなされているが、これによって男性の育児休業取得が進み、育児開始時に夫妻間の家事・育児に関する役割分担について夫妻双方の意識が高まることで、テレワーク勤務との相乗効果により夫妻間の家事負担感が軽減する可能性がある。この点に関しては、今後詳細な分析が必要である。

本論文に残された課題は次の2点である。第1に、テレワーク勤務の有無を外生として扱っている。

⁷⁾ 父親の育児休業取得促進を目指した制度として、育児・介護休業法では子の出生後8週間以内に4週間まで育児休業とは別に休業を取得できる「産後パパ育休（出生児育児休業）」や、両親が育児休業を取得することで、育児休業取得可能期間が「子が1歳に達するまで」から「子が1歳2か月に達するまで」に延長される「パパ・ママ育休プラス」が定められている。また、事業主は本人またはその配偶者が妊娠・出産を申し出た場合、産後パパ育休に関する制度を含めて制度の周知と意向確認を行う必要がある。（厚生労働省「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律及び雇用保険法の一部を改正する法律の概要（令和3年法律第58号、令和3年6月9日公布）」（<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/001259502.pdf>）、厚生労働省「改正育児・介護休業法のあらまし（平成22年7月）」（<https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/07/dl/tp0701-1o.pdf>）を参照）

テレワーク勤務と理想と実際の生活時間の乖離の因果関係を明らかにするためには制度改正等を利用した分析が必要である。

第2に、テレワークの実施頻度や実施時間帯は1日の時間の使い方に影響すると考えられるが、今回の分析ではこれらが考慮されていない。より精緻な分析を行うためには、夫妻それぞれのテレワーク頻度や1日のうちにテレワークを行う時間帯を考慮する必要がある。以上の点は、今後の課題としたい。

【謝辞】

本研究はJSPS 科学研究費（科研費）基盤研究（C）「テレワーク制度が夫妻の生活時間配分・生活満足度与える影響に関する計量分析（課題番号21K01477）」の助成を受けている。

参考文献

- Bardon, J. R., E. Zeballos (2020), "The effect of working from home on major time allocations with a focus on food-related activities," *Review of Economics of the Household*, Vol.18, pp.1165-1187.
- Del Boca, D., N. Oggero, P. Profeta, M. Rossi (2020), "Women's and men's work, housework and childcare, before and during COVID-19," *Review of Economics of the Household*, Vol.18, pp.1001-1017.
- Giménez-Nadal, J. I., J. A. Molina, J. Velilla (2018), "Telework, the Timing of Work, and Instantaneous Well-Being: Evidence from Time Use Data," *IZA DP*, No.11271.
- Sevilla, A., S. Smith (2020), "Baby steps: the gender division of childcare during the COVID-19 pandemic," *Oxford Review of Economic Policy*, Vol.36 (S1), pp. S169-S186.
- 厚生労働省 (2010)「改正育児・介護休業法のあらまし（平成22年7月）」<https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/07/dl/tp0701-1o.pdf>, 令和6年6月16日閲覧。
- 厚生労働省 (2021)「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律及び雇用保険法の一部を改正する法律の概要（令和3年法律第58号，令和3年6月9日公布）」<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/001259502.pdf>, 令和6年6月16日閲覧。
- 厚生労働省 (2024)「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律及び次世代育成支援対策推進法の一部を改正する法律の概要（令和6年法律第42号，令和6年5月31日公布）」<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000788616.pdf>, 令和6年6月20日閲覧。
- 厚生労働省「働き方・休み方改善ポータルサイト」, <https://work-holiday.mhlw.go.jp/telework/>, 令和6年6月16日閲覧。
- 内閣府「『仕事と生活の調和』推進サイト」, https://www.cao.go.jp/wlb/government/20barrier_html/20html/charter.html, 令和6年6月16日閲覧。

